

## 保育の心の初め

中村美智子

おべんとうの時間、誰もいなくなつた園庭の前をなげなく通りかかった

時、砂場の脇の水仙がスクッと陽の光に向かつて伸びているのが目にはいりました。日に何度も通る場所なのに、いちいち気を止めて見たことがなかっただけに、その花の美しさに一瞬心を奪われました。

ちょうどそこを通りかかった女の子に、

「みっちゃん、おはながみんなあつちを向いているわね。どうしてかしらね」と、思わず声をかけますと、

「あのね、おすなばであそびたいから、みんなといっしょに。でもね、できなから見ているの」と、じつに幼

児らしい発想の返事が、即座にかえってきました。

ほんの数秒間、私の肩に手をおいて水仙を眺めますと、女の子はスキップでお部屋の方へはねていってしまいました。

私は、このとき、花は光の方に向いているのだということしか考えていませんでしたから、大変びっくりしました。

(ああそうだ、ここは子どもの園だった)

ひとりで水仙を見た時、私は、園にはいてもただの大人にすぎなかったのです。もしも女の子が何も言わなかったら、私はその子の表情も見すにつま

らない理屈を口に出していたかもしれませぬ。そうしたら、水仙は女の子にとっても私にとってもただ美しい水仙で終わってしまったでしょう。そう思った時、何かが私の体にずしんとぶつかった気がしました。

少し保育に慣れると、無意識のうち子どもに接する時とそうでない時をうまく使い分けてしまうこともありそうです。しかし、いつでも幼児の気持ちをくみとれる準備がなければならぬ。語りかけ(無言のそれも多いのですが)をよくきいて、そこからひきだしながら幼児の心を育くんではないかなければならない。"保育の心の初めは"と自分に問い続けていくことを忘れてはならないこと、そうすれば感激もより深いことを、このつかの間の触れあいにも痛感したのです。

(千代田区立錦華幼稚園)